

## IV 音楽 3年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) 自分の思いをもち、役割を意識して表現するためのアンサンブル活動を位置付けた題材構成 ～少人数によるアンサンブル活動の活用～

題材や曲との出会いの場面を大切に、「曲を知る」「楽譜を読む」活動を全体で行い、どのように演奏していくのかを考え、その思いを言語活動により伝え合うことで、よりよい表現へとつなげていくことができた。音楽的な「見方・考え方」は、日々の授業の中で積み重ねられていくものであると考える。特に低学年では、日常的な積み重ね（リズム打ち・階名唱など）を大切にしていけることが、基礎・基本的な技能を身に付けるためには有効である。新しい曲と出会ったとき、楽譜を見たり曲を聴いたりして気付くことは、音楽を形づくっている要素に直結している。音楽を形づくる要素に着目して曲の解釈を共有したことで、ペア、グループ、全体と人数を変えてアンサンブル活動を行った場合でも、自分の役割を意識して演奏しようとする姿が見られた。「一人では自信がないけれど、仲間と一緒にいたらできそうな気がする。」これが音楽表現の醍醐味ではないだろうか。また、技能面においても、個で繰り返し練習してからペアで聴き合ったり、ペアやグループで教え合ったりする中で、音楽表現の幅が広がり、自信をもって演奏する姿が見られた。このような活動を通して、着実に技能の習得が高まったと考える。

#### (2) 音楽的な「見方・考え方」を根拠とした「聴き合う」場の設定

##### ～聴く耳を育てる～

授業の導入段階では、前時までの自分たちの現状を省察する時間を設けたことで、よりよい演奏にするために、何が必要であるのかを自分たちなりに見いだすことができ、主体的な学びにつながった。録音した音源を聴き、自分たちの演奏を客観的に聴く活動を取り入れたことで、音楽的な「見方・考え方」を根拠として表現の改善を図ることができた。

題材の終末では、お互いに聴き合い評価する場を設けた。「対話」を重ねながら協働的に省察することで、よい点や改善点を、音楽的な「見方・考え方」を根拠にして伝え合うことができた。自分たちの課題を確認すると同時に、そこから次の課題を見つけ出すことで、子どもたちが本当に必要とする活動が展開できた。「聴き役」「演奏する役」を交互に行うことで、それぞれの立場からフィードバックし合う協働的な省察が生まれ、よりよい表現を求めながら演奏の高まりにつなげることができた。

自分の耳で聴き、言葉で伝えなければいけない場面を意図的に作っていくことが、聴く耳を育てるためには有効であることが分かった。音楽的な要素にこだわり意識させること、教師がタイミングを見て価値付けていくことが、音楽的な表現の高まりにつながると考える。

### 2 課題 自分たちの音楽表現を見つめ直す手立ての工夫

思いや意図に合った表現をするために、自分から技能を身に付けたいと思う気持ちを高め、演奏のこつを主体的に探っていくことが課題である。子ども自身がよりよい表現のために自らの力量を見つめ、常に音楽的な「見方・考え方」を根拠として繰り返しながら、音楽表現を工夫することのよさを実感し、自分なりに学び方を獲得していく手立てを探っていきたい。個の技能を見取る時間を確保し、表現の高まりを価値付けていくことも大切になってくると考える。